

幼児期における音楽的諸要素の認識の変容： 音楽素質診断テストを手がかりとして

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: SANO, Mina メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3836

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



幼児期における音楽的諸要素の認識の変容 —音楽素質診断テストを手がかりとして—

児童学部 児童学科 佐野 美奈

要旨：この研究の目的は、2011年度に行った音楽テストの結果を分析することを通して、幼児期における音楽的諸要素の認識の変容について一考察を加えることである。71名の保育園4歳児と69名の保育園5歳児に対して、2011年5月と2012年3月の2回、音楽テストを実施した。その結果、4歳児と5歳児の発達による差異と、各年齢の2回のテスト間における1年間の成長の差異が、明らかになった。

キーワード：幼児期、音楽的諸要素、音楽テスト

I 研究の経緯

筆者は、幼児期の発達の特徴である劇化を生かした音楽的表現育成プログラムの実践を、保育園の3歳児、4歳児、5歳児に対して3年間行ってきた¹⁾。その音楽的表現育成プログラムは、「1. はじめの活動」「2. はじめの活動からパントマイムへ」「3. 即興表現からストーリー創造・劇化へ」「4. ストーリーの劇化」という4段階から成る活動である。筆者は、その理論モデルを、ドラマ教育研究者の Bolton, G. (1979, 1982, 1988)^{2) 3) 4)}の劇化指導法に依拠し、実践モデルについては、劇化と音楽の統合を図った Rubin, J., & Merrion, M. (1996a, 1996b)^{5) 6)}を参照して考案した。その音楽的表現育成プログラムは、名前ゲームや日常生活経験における音への気づきから次第にリズムパターンの感受やリズムの対話活動、クリエイティブ・ムーブメント、ドラマティック・プレイへと進んで音楽経験と統合され、クリエイティブ・ドラマへの展開過程を経験するものとなっている。そこで方向づけられるストーリー性による動機づけによって、子ども達の音楽経験が促進される。結果的に、子ども達は、音楽的諸要素の認識へと向かうことになる。この音楽的表現育成プログラムの特徴は、子どもの自発的表現を導くと同時に、音楽的諸要素の認識を目的としたところにある。また、その実践過程を重ねるにしたがって、4段階のうちの様々な活動段階間の移行が、一つの活動においても生じ、保育者の実践に対する意識も変容するといった効果も見られた。その結果、3年間の実践過程における事例の分析考察を通して、3歳児に特徴的な変容は、身体音によるリズムの表現に見られ、リ

ズムパターン形成の特徴的な変容は4歳児に生じていることが明らかになってきた。それは、「動きの要素」「表象化の要素」「音楽の要素」を分析考察の視点とし、「音楽の要素」を Rubin & Merrion による理論的枠組みで、「動きの要素」と「表象化の要素」を主に Bolton の劇化指導法による理論的枠組みによって、幼児の音楽的表現の変容を捉えようとした分析考察によるものであった。そして、それらの実践過程における活動の変容を辿り、実践モデルを見い出してきた。しかしながら、この実践過程に対する評価は、担当保育者の自己評価と実践園内での評価であり、客観的な尺度を用いたものではなかった。それは、幼児の音楽的表現を捉える理論的な方法が先行研究においてもあまり検討されてこなかったためであり、幼児の音楽的表現は量的に捉えにくいと考えられたためでもある。

そこで、筆者が音楽的諸要素の認識の視点から幼児の音楽的表現を捉える方法を検討していく上で手がかりとしたのは、音楽素質診断テストであった。ここでは、幼児の音楽的表現における音楽的諸要素の認識の変容を捉えるために、音楽素質診断テストを参照した経緯を明らかにした上で、保育園4歳児と5歳児に行った音楽テストの実施結果について考察したいと考える。

II 音楽能力テストに関する先行研究の検討

音楽能力テストには、シーショア音楽才能検査 (Seashore Measures of Musical Talent, 1919)^{7) 8)}、ドレーク音楽適性検査 (Drake Musical Aptitude Test, 1932)^{9) 10)}、ウィング標準音楽知能検査 (Wing

Standardised Tests of Musical Intelligence)¹¹⁾、ゴードン音楽適性検査プロフィール (Gordon Musical Aptitude Profile, 1965)^{12) 13)}、ベントレー音楽能力検査 (Bentley Measures of Musical Abilities, 1966)^{14) 15)} などがある。

日本で開発されたものの中には、「音研式 幼児音楽適性テスト」(1966)^{16) 17)}、「田研式 音楽素質診断テスト」(1953)¹⁸⁾ 等が挙げられる。それぞれ、音楽的諸要素の認識度を個々に測定し、音楽に優れた適性を持つ子どもや音楽的諸要素に関するその認識度を明らかにしようとしたものである。さらに、それらの音楽能力テストの調査結果から、子どもの音楽能力の発達における水準を見い出そうとされていた。

それらにかかわる先行研究には、「音研式 幼児音楽適性診断テスト」を幼児から就学期の子どもまでを対象に行った調査結果を分析して、その発達の特徴を抽出したものがいくつか見られる。それには、長谷川(2009)¹⁹⁾の調査による幼児の音楽的諸要素の認識度に関する発達の特徴の抽出、岡山(1995)²⁰⁾によるテスト項目間の関係性の検討、黒瀬(1991)²¹⁾による幼稚園児から小学校1年生までの音楽能力の発達過程に関する研究が挙げられる。また、神林ら(2003)²²⁾による音楽指導前後の「音高識別テスト」「音記憶テスト」の調査研究や大山(1988)²³⁾の学齢期前音楽基礎能力テストによる身体的運動のバランス、リズム感、耳の基礎的な発達研究もある。

長谷川(2009)は、4歳児32人、5歳児40人にそれを行った結果、年齢による発達段階の差はあまり見られず、単音より和音を聞き取りやすいと幼児が感じており、男女の能力差は見られなかったと報告している。岡山(1995)は、テスト項目間において「音感に関する能力」「音を弁別する能力」「表現力に関する能力」の3因子を抽出している。黒瀬(1991)は、各設問に対する正答率とその年齢に伴う変化を調べた結果、強弱の弁別と鑑賞能力、音色、和音について小学校1年生でこのテストが求める水準に到達し、単音の高低の識別は小学校1年生より遅い段階に到達し、リズムの理解やメロディの高低の弁別や開離和音の弁別も同様に遅い段階で到達すると考えた。

神林ら(2003)は、音楽指導の有効性を音高識別テストの結果に見い出し、「音記憶テスト」で得点に変化は認められなかったことから、少しずつ旋律を長くしていく方法に指導法の可能性を求め、大山(1988)は、実態調査によって幼児の発達の特徴として、音の長短識別力や音高識別力はほぼ全幼児に認められたが、音

高再現では、聴覚だけの場合に再現困難な幼児が50%強と、リズム感よりも感覚面と機能面との不均衡差が大きい結果となったことを示している。

さらに、栗原(1973)²⁴⁾のように、普通児と薄弱児に対して比較研究するために「田研式 音楽素質診断テスト」を行い、普通児ではほとんど相関がないのに対して、精神薄弱児について特に、強弱判断、数・長短判断、リズム判断とIQとはかなりの相関があることを示している。

一方、「田研式 音楽素質診断テスト」(1953)については、それを作成した茂木ら(1955)²⁵⁾が、音楽素質診断テストを約20名のグループで3つの幼稚園児に行い、高低弁別・数・長短・協和が比較的下位を示し、強弱、リズム、表現鑑賞が上位を示したという調査研究について述べている。それによれば、得点率の高かった領域は、速度比較(99%)、音群全体の強弱(93%)、演奏中の強弱判断(86%)、協和醜の判断(86%)、旋律的表現に対する審美的判断(79%)、リズムに対する反応ならびに弁別(77%)、鑑賞力の程度(72%)、等が挙げられる。感受を主として処理できる内容が得点率が高く、音符の習得が必要とされる問題、複雑な重奏の問題は幼児には理解しにくかったようである。内部相関は低く、特に高低弁別と各下位テストとの相関は低かったということである。しかし、これには、幼児が何歳児か示されていない。彼らは、「田研式 音楽素質診断テスト」の意義を、茂木(1955)「田研式音楽素質診断テストにおける音楽素質と測定尺度」²⁶⁾において示している。茂木は、素質について、物理的な量と質における質を意味するものではなく、同時に量的に変化する傾向を含んだものであると捉えている。茂木は、音の感受性に重点を置いて、①音の高低弁別、②音の強弱弁別、③音の数と長短の判別、④音のリズム判断、⑤音の協和判断、⑥簡単な旋律による表現と鑑賞、⑦音の記憶といった7要素について、子どもの音楽的素質診断を試みた。音に対する記憶の能力は、音楽素質にとって決定的な条件であるとも言える。テストの標準尺度については、幼稚園児は主として東京都内で知能水準が東京都平均とされる幼稚園を想定して作っているということであった。同年には、また、守屋ら(1955)²⁷⁾が、その「音楽素質診断テスト」について、音楽的環境による3段階で分類した対象5歳児のテスト結果とWISC全検査IQとの相関を見い出し、知能と音楽能力との関係性を明らかにしようとした。その結果、最も音楽的環境に恵まれた少数の対象児についてのみ、動作性IQについて高い相

関が見られたことを明らかにした。

この「田研式 音楽素質診断テスト」は、幼児から就学期の高校生に至るまでに行うことができ、「音の強弱」「音の数・長短」「リズム」「音の高低」「協和」「表現・鑑賞」という6項目の下位テストの粗点と、それらの合計得点から音楽素質段階を調べようとするものであった。

下位項目のテストは5段階評価、音楽素質段階は7段階の評価となっている。下位項目のテストの段階評価は、音楽的表現に対する興味や感情と理解度について大きく発達しているか否かに2分されている。また、それぞれの下位項目のどの領域が良いかどうかによって個別の音楽素質の特徴を捉えることも可能であるとされる。一方で、作成者は、音楽の才能は訓練や指導といった後天的な要因が強いものであり、素質を診断することがその子どもの能力を既定するものではないと捉えているようである。

現代の音楽的表現に関する捉え方を考えると、こうした「田研式 音楽素質診断テスト」の特徴から、音楽的諸要素とそれらを同時に感受する「表現・鑑賞」における音楽的想像力についても測定できると推察された。この診断テストを参照して作成した音楽テストを用いて、音楽的表現における音楽的諸要素の認識度の測定を行うことができると考えられた。

Ⅲ 音楽テストの実施

－研究の目的と方法－

この研究の目的は、「田研式 音楽素質診断テスト」を参照して作成した音楽テストを4歳児と5歳児に年度初頭と年度末との2回実施して、その結果を分析することにより、幼児期における音楽的諸要素の認識の変容について考察することである。そして、量的な測定法の可能性を探っていきたいと考える。

そのために、筆者による音楽テストを、大阪府内の保育園児133人（4歳児71人、5歳児62人）に行い、音楽的表現にかかわる諸要素の認識度を測定し、まず、幼児の実態を把握しようとした。

対象保育園児の内訳は、I保育園58人（4歳児34人、5歳児24人）、K保育園30人（4歳児15人、5歳児15人）、U保育園45人（4歳児22人、5歳児23人）であった。そのうち、I保育園とU保育園は、遊びを中心とした園であり、園の方針や活動形態、環境も類似している。K保育園は、モンテッソーリ教育を導入しており、縦割り保育、個別の感覚教具による活動が多いが、音楽的表現については特にモンテッソー

リ音楽が実践されているわけではない。

次に、音楽的表現育成プログラムを実践する前と実践開始1年後の調査結果を比較するために、この活動プログラムを実践する園と実践しない園を決めた。そのうち、音楽的表現育成プログラムを実践された経験のあるU保育園においてのみ、再度2011年5月からその活動プログラムを実践した。

そうして、保育形態の異なる園も含めた中で、幼児の音楽的表現にかかわる音楽的諸要素の認識度の変容を、約1年後に再度音楽テストによって測定しようとした。ただし、ここでは、4歳児全体と5歳児全体についてのみ、結果の分析と考察を行う。

(1) 調査実施の日時

<1回目>

U保育園：2011年5月16日10：30～11：30

I保育園：2011年5月18日15：30～16：30

K保育園：2011年6月10日10：00～11：00
と11：00～12：00

<2回目>

U保育園：2012年3月26日9：30～10：30

I保育園：2012年3月16日10：00～11：00
と11：00～12：00

K保育園：2012年3月22日9：30～10：30

(2) 対象児

<1回目>

U保育園：45人（4歳児22人、5歳児23人）

I保育園：58人（4歳児34人、5歳児24人）

K保育園：30人（4歳児15人、5歳児15人）

<2回目>

U保育園：41人（4歳児20人、5歳児21人）

I保育園：60人（4歳児34人、5歳児26人）

K保育園：27人（4歳児15人、5歳児12人）

(3) 実施方法

音楽テストを各園の4歳児、5歳児に対して約1時間で行った。「音の強弱」「音の数・長短」「リズム」「音の高低」「協和」「表現・鑑賞」という6項目の下位テストの粗点と、それらの合計得点から音楽的諸要素の認識に関する発達状況を調べようとした。それらのテスト項目は、「音の強弱」10項目、「音の数・長短」10項目、「リズム」10項目、「音の高低」20項目、「音の協和」10項目、「表現・鑑賞」となっている。下位項目のテストの評価は、音楽的表現に対する興味や感情

と認識度について用いられる。

同一のテストを同じ手順で、前述Ⅲ(1)の2回ずつの日時に行った。

IV 結果と考察

1. 音楽的諸要素の関係性について

ここでは、2011年5月16日から6月10日までに行った第1回目の音楽テストの調査結果について考察する。まず、4歳児と5歳児の調査結果から、定量的分析を行い、幼児の音楽的諸要素の捉え方について述べる。

4歳児と5歳児の個別データから、音楽テストにおける音楽的諸要素がどのように捉えられるかについて、各諸要素の特性抽出を試みた。表1は、4歳児と5歳児の1回目のテストの記述統計量を示している。

表1 記述統計量

下位項目	平均値	標準偏差
強 弱	6.9774	2.02434
数 長 短	5.6015	1.57605
リ ズ ム	4.1504	1.86066
高 低	4.2218	1.90634
協 和	4.3910	2.53112
表現鑑賞	3.8797	2.41221

さらに、調査の個別データから上記の下位6項目に関する主成分分析を行い、第3主成分まで抽出した。説明された分散の合計によれば、第3主成分までで76.352%の説明力があり、第1主成分50.895%、第2主成分15.052%、第3主成分10.405%である。各データと主成分得点係数行列から、第1主成分に関しては、

全ての下位6項目で類似した正の因子負荷量が見られ、「音楽表現の総合性」であると推定された。第2主成分に関しては、強弱、数長短と大きな正の因子負荷量があり、高低、表現鑑賞には負の因子負荷数が生じていることから、「相対的・数の規則性」であると推定された。第3主成分に関しては、強弱に正の大きな因子負荷量があり、数長短に負の大きな因子負荷量、続いてリズムや表現鑑賞にも負の因子負荷量が見られたことから、「音色の多様性」であると推定された。そして、相関行列から、高低と協和(.618)、高低と表現鑑賞(.568)、協和と表現鑑賞(.519)に比較的強い関係性が見られた。つまり、音色の感受が表現鑑賞の判断に、より関係性が強いと捉えることができるだろう。

また、平均連結法を用いたクラスター分析によれば、図1のようなデンドログラムが生じた。図1に示したとおり、4歳児、5歳児の音楽表現に関する下位6項目の認識において、リズム、高低、協和、表現鑑賞と、強弱、数長短に2分されていることがわかる。このことから、4歳児、5歳児の音楽表現に関する認識は、リズムと音の明確な高低の認識や音色の感受に依拠している部分があり、中でも、リズムと高低の距離が最も近く、それに音色が加わったものを音楽表現という包括的な感じ方で捉えていると考えられる。一方で、音の強弱、数・長短は、規則性や相対的な捉え方として、認識されていることがわかる。

このように、4歳児、5歳児にとっての音楽表現に対する認識は、リズムと音色がより表現鑑賞の判断基準となりやすく、数の規則性の側面は、別に感受されるものであることが見いだされた。

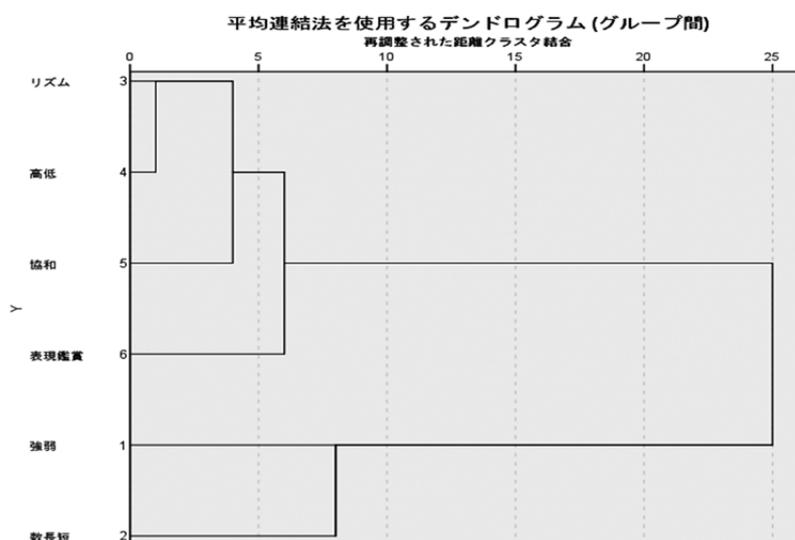


図1 クラスター分析の結果

2. 幼児の発達状況による音楽的諸要素認識の差異について

IVの1における幼児の音楽的表現の捉え方に関する分析を踏まえて、次に、調査対象の実態について分析考察する。なお、ここで示す下位6項目の平均点については10点満点で表す。一方、粗点合計は、各項目の粗点を合計したものであり、70点満点で表す。この方法は、音楽素質診断テストの表示を参照したものである。

(1) 1回目の調査対象児全体133名(4歳児71人、5歳児62人)の結果

ここでは、U保育園、I保育園、K保育園の統合した全体の調査結果について示す。4歳児の1回目テスト結果全体と5歳児の1回目テスト結果全体について、対応の無い粗点合計平均値の差の検定を行ったところ、ウェルチの検定により、 $t=5.63$ 、 $df=127.64$ 、 $p<.05$ で統計上の有意差が見られ、5歳児1回目テスト対象者全体の粗点合計の平均値は、4歳児1回目テスト対象者全体のそれより高かった。

こうした分析結果に基づいて、4歳児全体と5歳児全体の各下位項目について、次に述べる。

表2は、全体133名における4歳児71名と5歳児62名の下位項目別平均得点と、粗点合計について示し

表2 1回目テスト対象者の全体 下位項目別の点数と粗点合計

	(1) 強弱	(2) 数・長短	(3) リズム	(4) 高低	(5) 協和	(6) 表現・鑑賞	粗点合計
4歳児 \bar{X}	6.00	5.01	3.55	3.91	3.61	3.23	29.28
SD	1.94	1.66	1.66	2.13	2.40	2.28	10.54
5歳児 \bar{X}	8.10	6.27	4.84	4.58	5.29	4.63	38.26
SD	1.47	1.16	1.85	1.56	2.39	2.36	7.79

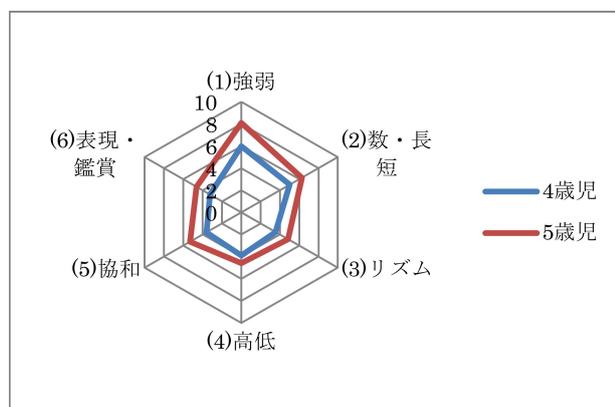


図2 保育園の1回目4歳児と5歳児の下位項目別平均得点

たものである。概ね、3つの保育園の発達状況に見られたように、リズムの認識度が高く、協和以外については、4歳児と5歳児との間にそれほど著しい差異が見られたわけではなかった。

また、図2からは、4歳児と5歳児の下位項目別点数の偏りは類似していることが読み取れ、音の高低に関してはあまり変化が見られていないことがわかる。但し、強弱や数・長短をはじめとする他の下位項目には著しい伸びが見られ、粗点合計では、29.28点から38.26点への伸びが見られた。

そして、図3は、粗点合計における、4歳児と5歳児の人数分布を示したものである。それによれば、平均的な評価は30点以上35点未満にあり、それを境に45点以上50点未満まで5歳児が分布し、3段階以下にほとんど4歳児が分布していることがわかる。ただし、5歳児になっても20点未満に位置している子どもも少数おり、その3名について個別の下位項目別推移を見ると、音の協和や鑑賞・表現を中心として、リズムや音の高低の認識ができなかったことがわかった。保育園で他児と同様の音楽経験をしているにもかかわらず、それらにほとんど興味を持たずにいることが読み取れる。

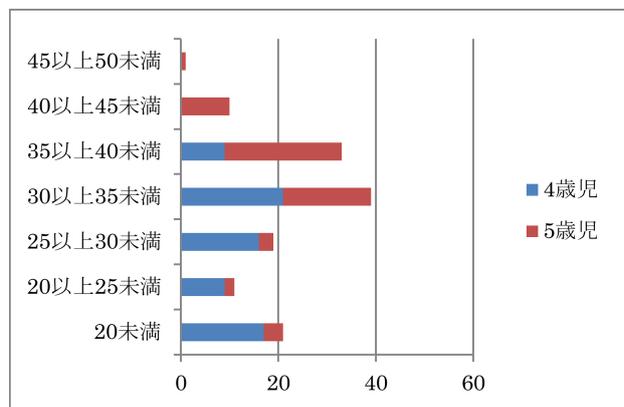


図3 4歳児と5歳児の粗点合計の人数分布

表3 2回目テスト対象者の全体 下位項目別の点数と粗点合計

	(1) 強弱	(2) 数・長短	(3) リズム	(4) 高低	(5) 協和	(6) 表現・鑑賞	粗点合計
4歳児 \bar{x}	7.28	6.97	5.19	4.96	5.93	5.32	35.53
SD	1.43	1.47	1.71	1.33	1.57	1.41	5.57
5歳児 \bar{x}	8.25	6.83	6.8	5.59	6.02	6.36	39.54
SD	1.35	1.45	2.0	1.20	2.04	1.90	6.32

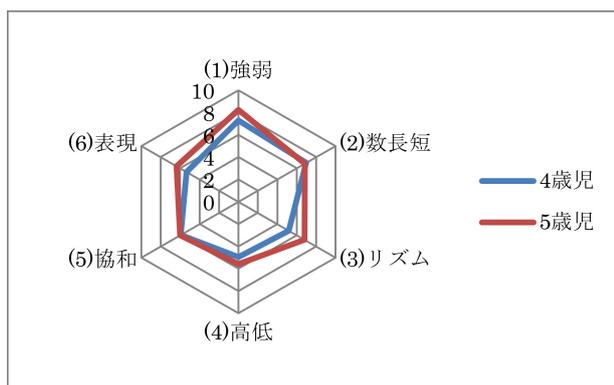


図4 保育園の2回目4歳児と5歳児の下位項目別平均得点

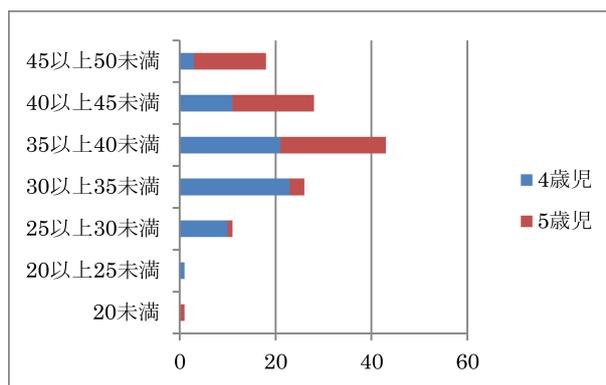


図5 4歳児と5歳児の粗点合計の人数分布

(2) 2回目の調査対象児全体128名（4歳児69名、5歳児59名）の結果

ここでは、2011年度3月16日から3月26日にかけて行った、同一の音楽能力診断テストに関する2回目の調査結果について分析・考察する。これらは、U保育園、I保育園、K保育園の統合した全体の調査結果である。表3は、全体128名における4歳児69名と5歳児59名の下位項目別平均得点と粗点合計（70点満点）について示したものである。概ね、3つの保育園の発達状況に見られたように、リズムと表現・鑑賞以外では、4歳児と5歳児とにそれほど大きな差異は見られず、粗点合計でも、その傾向は同様であった。

図4からもわかるように、2回目の保育園4歳児と5歳児には、あまり差異がなく、リズムや表現・鑑賞、強弱については5歳児の方が少し高得点であるが、協和、音の数・長短といった下位項目については、ほとんど変わらない。また、図5は、粗点合計における4歳児と5歳児の人数分布であり、35点以上40点未満を基準として、それ以上の得点には5歳児の多くが、

それ以下には4歳児が分布している。

(3) 2回の調査結果の比較について

ここでは、1回目と2回目との調査結果から両者の推移を4歳児と5歳児について示す。

まず、4歳児の1回目と2回目、および5歳児の1回目と2回目のそれぞれのデータにおいて、2回とも音楽テストを受けた園児のみのデータを抽出し、対応のある粗点合計平均の差の検定を行った。

(3)-1 4歳児における1回目テスト結果と2回目テスト結果との比較

表4に示した1回目テストと2回目テストの両方を受けた4歳児60名の粗点合計について対応のある平均の差の検定を行ったところ、 $t=8.03$ 、 $df=59$ 、 $p<.05$ で統計上の有意差が見られ、2回目の平均値が高いことが示された。

そうした結果に基づいて、4歳児における音楽テストの各下位項目における伸びについて考察すると、図6から、下位項目によっては、(5)協和や(6)表現・鑑賞のように、1年間の伸びが大きいことがわかる。

表4 4歳児の1回目と2回目に関する粗点合計

		平均値	N	標準偏差	平均値の標準誤差
ペア1	4歳児 1回目	28.9333	60	10.33485	1.33422
	4歳児 2回目	40.4167	60	5.53048	.71398

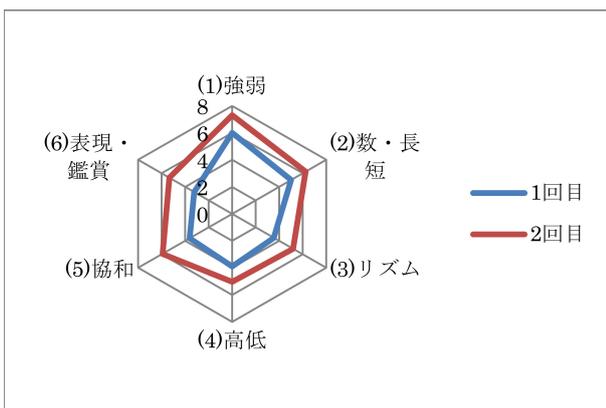


図6 4歳児の1回目テストと2回目テストの下位項目別平均得点

表5 5歳児の1回目と2回目に関する粗点合計

		平均値	N	標準偏差	平均値の標準誤差
ペア1	5歳児 1回目	38.6471	51	7.39682	1.03576
	5歳児 2回目	44.7451	51	6.37446	.89260

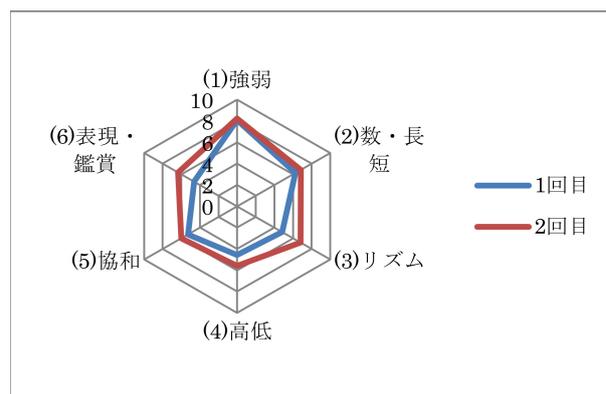


図7 5歳児の1回目テストと2回目テストの下位項目別平均得点

(3)-2 5歳児における1回目テスト結果と2回目テスト結果との比較

表5に示した1回目と2回目の両方を受けた5歳児51名の粗点合計について対応のある平均の差の検定を行ったところ、 $t=6.49$ 、 $df=50$ 、 $p<.05$ で統計上の有意差が見られ、2回目の平均値が高いことが示された。

こうした結果に基づいて、4歳児における音楽診断テストの各下位項目における伸びについて考察すると、図7から、下位項目における(3)リズムや(6)表現・鑑賞に、1年間の大きな伸びが見られることがわかる。ただし、(1)強弱、(2)数・長短、(5)協和については、あまり大きな変容は見られなかった。

V 考察のまとめ

ここで行った音楽テストは、これまで質的分析を行った3歳児には実施されていない。テスト項目から、4歳児以上でなければ、量的データにならないと判断されたためである。また、4歳児においても、1回目テスト結果では、テスト実施の環境が静謐であり、テスト項目理解に関する保育者の援助や、筆者による説明があったにもかかわらず、なかなか正解に至らないテスト項目があったことも事実である。しかし今回、

それは、音楽的諸要素や事象の概念に対する認識度の個体差を表しているものと捉えた。

結果的には、4歳児よりも5歳児の方が、1回目テスト結果でも2回目テスト結果でも有意に得点が高かった。また、4歳児の1回目テスト結果と2回目テスト結果との比較、および、5歳児の1回目テスト結果と2回目テスト結果との比較では、4歳児と5歳児の両方で、2回目テスト結果の方が有意に得点が高いことがわかった。そのことは、幼児期における音楽的諸要素の認識の変容が著しいことを示唆していると言える。

そして、下位項目別では、音楽的諸要素を統合した形で捉えなければ理解できない表現・鑑賞よりも、音の強弱や数・長短、リズムといった数の規則性の方が、幼児には認識されやすいという傾向が明らかになった。それらは、IVの1に示したように、表現・鑑賞については、音の高低や協和といった音色の感受が幼児の判断基準となっていて、様々な音楽経験や音楽的諸要素の認識の発達が必要であることを意味している。

ここでは、保育形態や保育方法の異なる3園を総合した全体の結果のみの考察について示したが、別稿では、園別、保育方法による差異について比較分析して

いる。そのことによって、どのような保育方法が効果的に幼児の音楽的諸要素の認識を促進するのか、実践過程の理論的考察や評価の尺度について検討する可能性を見出すことができると考えられる。

注および参考文献

- 1) 「劇化表現を生かした子どもの音楽経験プログラムの実践過程における「保育者の方向づけ」の特徴的な役割について」『乳幼児教育学研究』（日本乳幼児教育学会編）第17号，2008，pp.73-82に活動プログラムの概要を示している。実践の考察については、例えば下記に示すもの等が挙げられる。Sano, M., “The characteristics concerning the constitution of the music experience by early childhood educators : Through the practical process for three years.” 8th Asia-Pacific Symposium on Music Education Research ISME Asia-Pacific Regional Conference 2011. (Taipei Municipal University of Education, Taiwan) *Proceedings*, pp.101-102, Sano, M., “The characteristics of the development of the activity that started from “Sound awareness” for four-year-old children.” International Society for Music Education, 15th Early Childhood Education, 2012. (Ionian University, Corfu, Greece) *Proceedings*. p.109.
- 2) Bolton, G., *Towards a Theory of Drama in Education*, Longman Group Ltd., 1979.
- 3) Bolton, G., “Drama as learning, as art and as aesthetic experience,” *The Development of Aesthetic Experience*, Vol.3, 1982, pp.137-147.
- 4) Bolton, G., *Drama as Education*, Longman Group UK. Ltd., 1988.
- 5) Rubin, J., & Merrion, M., *Drama and Music Methods*, Linnet Professional Publications, 1996a.
- 6) Rubin, J., & Merrion, M., *Creative Approaches to Elementary Curriculum*, Heinemann, 1996b.
- 7) Sheashore, C., *The measurement of musical talent*, Kessinger Legacy Reprints, 1915.
- 8) Sheashore, C., *The Psychology of Music Talent*, Silver, Burdett and Company, 1919.
- 9) Gordon, E., “A study to determine the effects of training and practice on Drake Musical Aptitude Test scores,” *Journal of Research in Music Education*, Vol.9 (1), 1961, p.63.
- 10) Laurence, S., “Review of Drake Musical Aptitude Tests,” *Journal of Counselling Psychology*, Vol.5 (2), summer, 1958, pp.154-155.
- 11) Young, W., “The Wing Standardized tests of musical intelligence : An investigation of predictability with selected seventh-grade beginning-band students by John Pios Mitchum,” *Bulletin of the Council for Research in Education*, No.25, summer, 1971, pp.74-78.
- 12) Gordon, E., *Musical Aptitude Profile Manual*, Boston: Houghton Mifflin, 1965.
- 13) Gordon, E., “The musical aptitude profile,” *Music Educators Journal*, 53(6), 1967, pp.52-54.
- 14) Young, W., “The Bentley “Measures of musical abilities”: Validity report,” *Journal of Research in Music Education*, Vol.21, No.1, spring, 1973, pp.74-79.
- 15) Mills, J., “The “Pitch” subtest of Bentley’s Measures of musical abilities: A test from the 1960s reconsidered in the 1980s,” *Psychology of Music*, Vol.12, no.2, October, 1984, pp.94-105.
- 16) 黒瀬久子「幼児の音楽的能力の発達に関する研究 (I)」『下関女子短期大学紀要』 第6巻、1987、pp.49-62.
- 17) 翼篠 将、浜野政雄、茂木茂八、『音研式 幼児音楽適性診断テスト』日本文化科学社、1972.
- 18) 茂木茂八、小川一朗、鈴木清、『田中教育研究所音楽素質診断テスト』日本文化科学社、1959。これには、下表のような評価基準が示されている。

5 段階の領域別		
5	上	優秀 他領域も全て上ならば音楽専門家になる素質あり
4	中A	良好かなりの努力で音楽専門家になれる素質
3	中B	普通 音楽専門家になるのは難しい
2	中C	普通よりやや低い
1	下	低い 音楽方面には全く興味がない
総合得点の7段階別評価について		
7	最優	将来、音楽専門家になる素質あり
6	優	努力次第で音楽専門家になる素質あり
5	中の上	音楽に興味あるが、専門家になるには難あり
4	中	音楽にある程度の理解と興味あり
3	中の下	音楽のある方面で理解と興味あり
2	低い	努力なしに音楽の面に理解や興味を持ってない
1	低い	音楽にはどうしても興味をもてない

- 19) 長谷川恭子 (2009) 「子どもの音高感および和音感の発達からみた保育における教材設定の観点－音楽能力診断テストの結果をふまえて－」 『淑徳短期大学研究紀要』 第 48 号 pp.137-153.
- 20) 岡山千賀子 (1995) 「音楽能力診断テストを構成する尺度の下位項目についての因子分析的研究」 『徳島文理大学研究紀要』 第 50 号 pp.83-96
- 21) 黒瀬久子 (1991) 「幼児の音楽的能力の発達に関する統計的分析－ I . 年齢に伴う各能力の発達」 『下関女子短期大学研究紀要』 第 9 号、pp.77-101.
- 22) 神林ノブ子、渡邊亮太、浪山厚子、河野順子、吉田一成 (2003) 「幼児の音高認知に関する研究－音楽指導を通して－」 『山口大学研究論叢、芸術・体育・教育・心理』 52(3) pp.239-245.
- 23) 大山美和子 (1988) 「幼児の音楽性について－音楽概念を中心として－」 『上越教育大学研究紀要』 第 7 巻第 1 分冊 pp.99-112.

- 24) 栗原輝雄 (1973) 「精神薄弱児における音楽的感受性と CA, MA, IQ および知能構造との関係について」 『特殊教育学研究』 第 11 巻、第 1 号、pp.7-13.
- 25) 茂木茂八、渋谷伊津子、小田島明子、森崎君枝 (1955) 「音楽素質と環境に関する研究」 『教育心理』 3 巻(9) pp.54-55.
- 26) 茂木茂八 (1955) 「田研式音楽素質診断テストにおける音楽素質と測定尺度」 『教育心理』 第 3 巻(1) pp.40-41)
- 27) 守屋光雄、釘宮冴子、高橋洋子 (1955) 「幼児における田中教育研究所編 音楽素質診断テストについて (その一) : 主として音楽環境及び WISC 結果とその比較」 『幼児の教育』 第 54 巻(9)、pp.18-20.

謝辞

調査にご協力くださいました保育園の諸先生方と子どもたちに、感謝申し上げます。

Transformation of the Recognition of Musical Elements in Early Childhood: A Music Quality Diagnosis Test as a Clue

Faculty of Child Sciences, Department of Child Sciences
Mina SANO

Abstract

The purpose of this study is to consider about transformation of the recognition of musical elements in the early childhood through analyzing the result of the music test referred to the music quality diagnosis test that I performed in 2011. 71 children of 5 years old and 69 children of 4 years old took the music test in May, 2011 and March, 2012. As a result, I found out a clear difference by the development between the 4-year-old children and the 5-year-old children, a difference of the one-year growth between the first time test and the second time test concerning both the 4-year-old children and the 5-year-old children.

Keywords : early childhood, musical elements, the music quality diagnosis test, music test, quantitative analysis